

京都大学工学部 正会員 西村直志

## 1 序

ポテンシャル論の力学への応用として積分方程式法が良く知られているが、本報ではある種の非線形構成関係を仮定して、破壊力学におけるポテンシャル論の解析的、及び数値的応用について述べる。

## 2 実式化

Bodner は、自己自身のモデル (Bodner & Patera<sup>1</sup>) が、多くの金属の粘性挙動を正しく記述し得るものであると主張している。この B-P モデルは次の様な表示を有する非線形 Maxwell 粘性モデルである：

$$\dot{\underline{\sigma}}^P = D_0 \frac{\underline{\sigma}'}{1 + J_2^n} \exp [-A^{2n}/2J_2^n], \quad (\underline{\sigma}' = \underline{\sigma} - \frac{1}{3}\text{tr}\underline{\sigma}, \quad J_2 = \frac{1}{2}\underline{\sigma}' \cdot \underline{\sigma}') \quad (1)$$

ここで  $\dot{\underline{\sigma}}^P$  は粘(塑)性変速度、 $\underline{\sigma}$  は応力、 $D_0, n$  は定数、 $A$  は一般には履歴に依存する数である。 $A$  が定数の場合を、彼らは完全塑性と呼んでいる。このモデルの最大の特徴は  $\dot{\underline{\sigma}}^P$  が有界である事である。これを一般化し、Small Scale Yielding 条件を考慮して、半無限クラック  $x_1 < 0, x_2 = 0$  に対する次の問題を考える：

$$\begin{aligned} \operatorname{div} \underline{\sigma} [\nabla \dot{\underline{\sigma}}^P] - \operatorname{div} \dot{\underline{\sigma}}^P &= 0 \quad \text{in } R^2 \setminus (x_1 < 0, x_2 = 0), \quad \dot{\underline{\sigma}}^P \rightarrow 0 \quad (r \rightarrow \infty), \\ (\underline{\sigma} [\nabla \dot{\underline{\sigma}}^P] - \dot{\underline{\sigma}}^P) \underline{n} &= 0 \quad \text{on } (x_1 < 0, x_2 = 0), \quad (\underline{n} = (0, 1)), \\ \dot{\underline{\sigma}}^P |_{t=0} &= dr (K_I^\infty f_I(\theta) + K_{II}^\infty f_{II}(\theta)) \quad \text{in } R^2 \setminus (x_1 < 0, x_2 = 0), \end{aligned} \quad (2 \ a, b, c, d)$$

ここで  $C$  は弾性定数(等方)、 $\dot{\underline{\sigma}}$  は変位、 $\dot{\underline{\sigma}}^P = \frac{d}{dt} \underline{\sigma}$  ( $t$ =時間)、 $K_I^\infty, K_{II}^\infty$  は対応する線形弹性問題の応力拡大係数、 $f_{I, II}$  はモード I, II の漸近解(線形弹性)の角度依存を表す関数、 $\dot{\underline{\sigma}}^P = C [\dot{\underline{\sigma}}^P]$  であり  $\dot{\underline{\sigma}}^P$  は有界かつ十分遠方で 0 になるとする。 $\dot{\underline{\sigma}}^P$  の無限遠での挙動の物理的意味は、遠方での応力が時間に依存しないことである。この時 crack 面で traction-free 条件を満たす Green 関数(静弹性学の)  $G$  を用いると  $\dot{\underline{\sigma}}^P$  は

$$\dot{\underline{\sigma}}^P(x) = \int_{R^2} \nabla_y G(y, z) \cdot \dot{\underline{\sigma}}^P(y) dV_y \quad (\dot{\underline{\sigma}}^P = \int_{R^2} \partial_{y_j} G_{kj}(y, z) \dot{\sigma}_{kj}^P(y) dV_y) \quad (3)$$

と書ける。モード III では応力計算の簡便さから応力関数中 ( $\sigma_{3i} = \sigma_{ij} \phi_{ij}$ ) を用いる事にすれば、

$$\dot{\phi}(x) = \int_{R^2} \partial_{y_j} G(y, z) e_{jk} \dot{\sigma}_{kj}^P(y) dV_y \quad (\dot{\sigma}_{kj}^P := \dot{\sigma}_{jk}^P) \quad (4)$$

が得られる。 $G$  は複雑であるので省略するが  $G$  については次の様な表示を有する：

$$G(y, z) = -\frac{1}{4\pi} \log \frac{(1z - 1\bar{z}_0)(1\bar{z} - 1\bar{z}_0)}{(1z + 1\bar{z}_0)(1\bar{z} + 1\bar{z}_0)}. \quad (z = y_1 + iy_2, \bar{z}_0 = x_1 + ix_2) \quad (5)$$

## 3 解析的応用

具体的な  $G$ 、 $G$  の形について調べてみれば解る様に、一般に次の事が成立する：

$$r \nabla G(y, z), r \nabla G(y, \bar{z})$$

$$= \begin{cases} \left(\frac{r}{r_0}\right)^{1/2} F''(0, \theta_0) + \left(\frac{r}{r_0}\right) F_1'(0, \theta_0) + \left(\frac{r}{r_0}\right)^{3/2} F_2'(0, \theta_0) + \dots & (r < r_0) \\ F_0''(0) + \left(\frac{r_0}{r}\right)^{1/2} F_1''(0, \theta_0) + \left(\frac{r_0}{r}\right) F_2''(0, \theta_0) + \left(\frac{r_0}{r}\right)^{3/2} F_3''(0, \theta_0) + \dots & (r_0 < r) \end{cases} \quad (6)$$

ここで  $(r, \theta) ((r_0, \theta_0))$  は点  $(z)$  の tip を中心とする極座標である。これらを用いて、(3)、(4) は

$$\int_0^{\infty} dr \int_{-\pi}^{\pi} d\theta F^{ij}(r, \theta) \cdot \dot{\sigma}_j(r, \theta) + r_0^{-1/2} \int_0^{\infty} dr \int_{-\pi}^{\pi} d\theta r^{-1/2} F^{ij}(r, \theta) \cdot \dot{\sigma}_j(r, \theta) - r_0 \log r_0 \int_{-\pi}^{\pi} F^{ij}(r, \theta) \cdot \dot{\sigma}_j(r, \theta) d\theta \\ + \left\{ \int_{-\pi}^{\pi} [Pf] \int_0^{\infty} r (\nabla G, \nabla G) dr + r_0 \log r_0 F^{ij}(r, \theta) \right\} \cdot \dot{\sigma}_j(r, \theta) d\theta \\ + r_0 Pf \int_0^{\infty} dr \int_{-\pi}^{\pi} d\theta \frac{F^{ij}(r, \theta)}{r} \cdot \dot{\sigma}_j(r, \theta) \} + o(t_0) \quad \text{as } r_0 \downarrow 0 \quad (7)$$

の様に漸近展開できる。ここに  $Pf$  は有限部分を表す。上式に於いて 1 項目は定数項、2 項目は  $r_0$  の形特異性、3 項目は  $O(\log r_0)$  の項、4 項目 ( $\{ \}$  内) は  $O(t_0)$  の項である。実際に計算を行ってみるとモード I, II の場合、 $r_0 \log r_0$  の項は 0 でない事がわかる。従って応力、歪は  $1/r_0$  以外に  $\log r_0$  の特異項を有する事となる。モード III の場合については上式より

$$\dot{\sigma}_j = \frac{K_{III}(t)}{\sqrt{r_0}} \begin{pmatrix} -\sin \theta/2 \\ \cos \theta/2 \end{pmatrix} - \left( \begin{pmatrix} \int_0^{\theta_0} (\sin 2\theta \dot{\sigma}_{10}^i - \cos 2\theta \dot{\sigma}_{20}^i) d\theta + \cos \theta_0 (\cos \theta_0 \dot{\sigma}_{10}^i + \sin \theta_0 \dot{\sigma}_{20}^i) \\ \int_{\theta_0}^{\pi} (\cos 2\theta \dot{\sigma}_{10}^i + \sin 2\theta \dot{\sigma}_{20}^i) d\theta + \sin \theta_0 (\cos \theta_0 \dot{\sigma}_{10}^i + \sin \theta_0 \dot{\sigma}_{20}^i) \end{pmatrix} + o(1), \right)$$

$$K_{III}(t) = \frac{1}{4\pi} \int_0^{\infty} dr \int_{-\pi}^{\pi} d\theta r^{\frac{1}{2}} (-\sin \frac{3\theta}{2} \dot{\sigma}_1^i + \cos \frac{3\theta}{2} \dot{\sigma}_2^i), \quad (8a, b)$$

が得られる。ここで  $\dot{\sigma}_{ji0}^i := \dot{\sigma}_{ji}^i|_{r=0}$ 。 $(8a, b)$  を導くに当てては  $\dot{\sigma}_1^i(-\theta) = -\dot{\sigma}_1^i(\theta)$ ,  $\dot{\sigma}_2^i(-\theta) = \dot{\sigma}_2^i(\theta)$ などを用いた。この対称性のために  $\log r_0$  の項は落ちる。また  $(8a)$  より  $O(1)$  の項は local に、又  $O(1/r_0)$  の項は  $(8b)$  より global に決定される量である事もわかる。実際前者は  $\dot{\sigma}_j^i$  の  $t=0$  での値のみで決まる。

以上の様に、従来は a priori な仮定に基づいて行なわれていた漸近展開により合理的に求めた事が出来た。

#### 4 数値的応用

(3), (4) の数値的応用として、所謂積分方程式法によればモード III の場合の完全塑性 B-P モデルについて  $K_{III}(t)$  及び  $X_1 = 0.0039 K_{III}^{0.2}/A^2$ ,  $X_2 = 0$  との  $\Omega_2$  を求めた。解析に於いては (4) に於ける  $\Omega_2$  を区分一定とし、600 頂点を用いた。積分は一切解析的に行はれ、T (これはモード I, II の時に也可能である)。本質的なパラメータは  $\mu$  のみであり、ここでは  $\mu=1$  とした。図 1 に解析結果を示す。なお (1), (8a) を用ひれば

$$\dot{\sigma}_j = \frac{K_{III}(t)}{\sqrt{r_0}} \begin{pmatrix} -\sin \theta/2 \\ \cos \theta/2 \end{pmatrix} + \frac{\mu D_0}{3} \begin{pmatrix} \sin 3\theta/2 + 3 \sin \theta/2 \\ -\cos 3\theta/2 - 3 \cos \theta/2 \end{pmatrix} + o(1) \quad (9)$$

なる表示が得られる。この 2 項近似 ( $K_{III}(t)$  の評価には (8b) を使う) 及び図 1 に示した応力を比較すると表 1 に示す結果を得、tip 近傍では (9) が比較的良好な近似である事が結論される。一方図 1 からも明らかに  $1/r_0$  の項一項では相当 tip に近づかない限り、精度良く応力を近似する事は出来ない。

謝辞

数値解析は、Northwestern 大学  
大学院生の宋見  
春氏が行つた。同氏  
の功績を、同氏  
に感謝の意を表  
す。

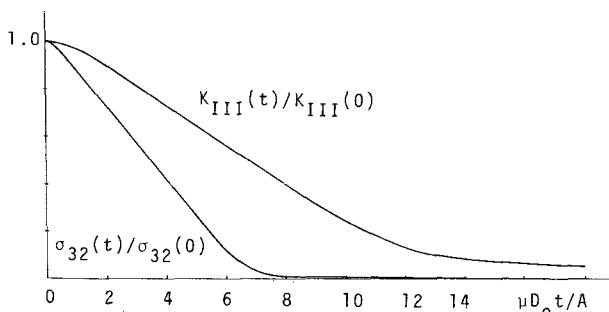


図 1 積分方程式法で求めた  $K_{III}(t)$ ,  $\sigma_{32}(t)$

$t/\mu D_0/A$	$\sigma_{32}/A$	
	2 項近似	BIEM
1	14.20	14.22
2	11.70	11.77
3	9.008	9.165
4	6.317	6.622

表 1

#### 文献

- 1 Bodner, S. R. & Paton Y., J. Appl. Mech. 24, 385, 1975.